

早稲田社会学会ニュース 第22号

2003年9月25日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: hanna1106@asagi.waseda.jp

今回のニュースの内容

1. 第55回早稲田社会学会大会の報告
2. 早稲田社会学会総会の報告
3. 研究例会の報告
4. 2003年度の研究助成について
5. 「研究助成取り扱い要領」の一部改正について
6. 入退会者のお知らせ
7. 事務局幹事交代
8. 学会費納入のお願い

1. 第55回早稲田社会学会大会の報告

第55回早稲田社会学会大会は、2003年7月5日(土)に早稲田大学文学部 第1会議室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

司会者 笹野悦子(早稲田大学) 大谷 崇(高崎経済大学)

報告者

森 泰生: 現場からの報告「販売最前線から見た消費者の購買心理」 ひとはどういう時「買いたい!」
と思うか?

小村由香(早稲田大学文学研究科): 感情労働と自己 サービス労働研究のための一考察

堤 隆夫(早稲田大学人間科学研究科): 健康と医療制度 成人病から生活習慣病への移相

七邊信重(早稲田大学文学研究科): 「不公平感」の表出の歴史の変遷 朝日新聞記事(1945年~1999
年)の分析から

藤巻祐規(早稲田大学文学研究科): 「社会問題の社会学」をめぐって

中山 健(早稲田大学文学研究科): ウィトゲンシュタインの呪術論・儀礼論

シンポジウム

テーマ：「社会学のアルケオロジー——社会学の起源を問う」

司会者：渋谷 望（千葉大学）

報告者：石原英樹（立教大学）：「社会学のアルケオロジー「進化概念をめぐる」

道場親信（無所属）：「社会」から「協同体」へ——新明正道における「東亜協同体」論

酒井隆史（大阪女子大学）：「社会的なもの」と敵対性

討論者：澤口恵一（大正大学） 入江公康（早稲田大学）

<シンポジウム報告> 司会者・研究活動委員会委員 渋谷 望（千葉大学）

大会シンポジウムは「社会学のアルケオロジー：社会学の起源を問う」をテーマにおこなわれた。今回、このようなテーマを設定した主催者側の動機は、社会学の対象である「社会的なもの」をいかに把握すべきかということにあった。と同時に、理論知・実践知としての社会学が「社会的なもの」といかに関わっているか／きたかを問題化することで、社会学の「現在性」を批判的に浮かび上がらせることになった。いわば社会学の歴史性を問うことによって、社会学の現状を議論の俎上に載せ、「社会学とは何か」を再検討する試みであったと言える。

報告は、石原英樹、道場親信、酒井隆史の3氏がおこない、それに入江公康、澤口恵一氏がコメントをつける形となった。石原氏の報告「進化概念をめぐる：normal から human nature へ」は、統計学とデュルケム社会学を結びながら、19世紀に、正規分布のなだらかな分散として把握された「正常／異常」というカテゴリーの登場が「社会的なもの」を把握する上での画期であったことを指摘し、また近年、再び「ヒューマン・ネチャー」に依拠した秩序概念が回帰しつつある現状を問題化した。道場氏の「社会から協同体へ：新明正道の東亜協同体論」では、新明正道の社会学を紹介し、その理論的営為に孕まれた、戦前日本における「社会的なもの」の生成と変容が確認された。最後に、酒井氏の報告「社会的なもの」と敵対性は、近年のグローバル化、ネオリベリズムを焦点に据え、それが結果として「社会」を消失させるプロセスでもあることを指摘し、敵対性の可能性を排除する新たな「秩序」とメンタリティの問題を提起した。

これら報告とともにシンポジウムが意図したテーマは、今後、社会学における「社会」を再考する上での重要な手がかりとなるものであろう。コメンテーターや会場においては、これらに対して質問が相継ぐこととなったが、時間的な制約もあり、議論が十分尽くせたとはいえなかった。再度今回のシンポの問題提起を確認すれば、社会学の前提であり対象でもある「社会的なもの」が、歴史的な形成物であること、そしてそうした性質のものであるがゆえに現在、消滅しつつあること、この二点につきる。批判するにせよ擁護するにせよ、このことが社会学の現状とどうかかわるのか、今後の議論と実践への示唆として受けとめられることになれば望外の喜びである。

2. 早稲田社会学会総会の報告

2003年7月5日に、大会に引き続いて開催された総会において以下の事項が報告されました。

- 1) 理事会および研究活動委員会、編集委員会の活動報告（2002年7月～2003年7月）
- 2) 2001年度研究助成報告について（庶務担当理事）（「学会ニュース」21号をご参照下さい）
- 3) 2003年度研究助成の申請と採用の経過について（庶務担当理事）
- 4) 「規約改正委員会」の設置について（庶務担当理事）（「学会ニュース」21号をご参照下さい）
- 5) 「研究助成取り扱い要領」の一部改正について（庶務担当理事）

また、同総会において以下の議案が提案され、慎重な審議の結果、すべて原案どおり可決されました。

- 1) 2002 年度決算案の審議と承認（同封の決算報告をご参照ください）
- 2) 2002 年度会計監査報告（同封の決算報告をご参照ください）
- 3) 2003 年度予算案の審議と承認（同封の予算報告をご参照ください）

3. 研究例会の報告

第 22 回（2003 年度 第 2 回）研究例会が以下のとおり開催されました。

日時： 2003 年 7 月 19 日（土） 13:00-16:00

会場： 早稲田大学文学部 32 号館 228 教室

報告者： 笹野悦子・小村由香・竹前禪・麦倉泰子・吉村俊美・多田光宏・木村正人・岡本智周・
浅輪亨（早稲田大学）

題目：「グローバル時代の政治と社会

ウィーン大学とのワークショップを通して見えてきたもの」

グローバル化の概念と異文化理解 笹野悦子・小村由香・竹前禪

同化と統合 麦倉泰子・吉村俊美

ポピュリズム 多田光宏・木村正人

ナショナル・アイデンティティ 岡本智周・浅輪亨

< 研究例会報告 >

2003 年 6 月 2 日から 6 日にかけての 5 日間、ウィーン大学政治学科の P. ゲーリッヒ教授、B. クラウサー講師をはじめとする比較政治論ゼミナールの一行が早稲田大学を訪問し、森元孝・文学部教授の演習に参加する大学院生・学部学生たちとジョイント・セミナーを開催した。セミナーは、最近のグローバル化の動きの中で変容しつつあるオーストリアと日本の社会状況について、双方の報告者がそれぞれ英語で説明し、全員でディスカッションする、という形式で行なわれた。今回の研究例会では、そのジョイント・セミナーの参加メンバーの方々に、当日の議論の模様とそこで得られた知見について報告していただいた（テーマ区分は、セミナー当日のプログラム編成にほぼ沿っている）。

第 1 部「グローバル化の概念と異文化理解」では、まず、小村由香氏・笹野悦子氏から、オーストリアと日本それぞれにおけるグローバル化をめぐる認識の異同について、報告があった。両氏によれば、グローバル化にはメリット（交流の活発化）/ デメリット（格差の拡大）の両面があるという点では、日澳ともに見解の一致がみられたが、その反面、ユーロの流通や移民問題など、グローバル化の影響が目に見える形で現れているオーストリアと、こうした現象がみられない日本では、グローバル化をめぐる認識に「温度差」があると感じられた、とのことであった。また、竹前禪氏からは、「富山コーラン事件」を例として、グローバル化がもたらす異文化接触の問題について報告があった。

第 2 部「同化と統合」では、吉村俊美氏・麦倉泰子氏から、オーストリアと日本の移民政策・福祉政策の比較について報告があった。両氏によれば、日澳の移民政策には、それぞれの地理的条件や政治意識の違いから、オーストリアの顕在的な統合志向 / 日本の潜在的な同化志向というコントラストがみられるが、両国とも、グローバル化の進展の中で、国民国家の枠組みに基づいた従来の政策が危機に直面しており、新たな社会保障システムが必要とされている、とのことであった。

第 3 部「ポピュリズム」では、多田光宏氏・木村正人氏から、オーストリアと日本の政治状況について、それぞれの政界で大衆的な支持を集めている政治家（イェルク・ハイダー / 小泉純一郎・石原慎太郎）の比較に基づいた報告があった。両氏によれば、ハイダーと小泉・石原では、政策の内容や支持者層に違いがみられる（「移民から仕事を奪い返せ」と訴えて失業者層に支持を伸ばすハイダー / 派閥政治や利益誘導の解消

を主張し、中流以上の階層からも支持を集める小泉・石原)が、いずれもマスメディアを通じた印象的な自己呈示や単純明快なスローガンを駆使した「劇場型」の政治手法を用いている点で、「ポピュリズム」という同じ枠組みのもとでとらえられるのでは、とのことであった。

第4部「ナショナル・アイデンティティ」では、岡本智周氏・浅輪亨氏から、オーストリアと日本の近代国家としてのアイデンティティの形成過程と現状について報告があった。両氏によれば、日頃のナショナル・アイデンティティの間には、第二次世界大戦における「戦争責任」を追究する際の姿勢の違い(戦前と戦後の「連続性」を主張するオーストリア/「断絶」を主張する日本)などの相違がみられるが、グローバル化の進行のなかで、ネイションの永続主義的な理解はどちらにおいても揺らぎつつあり、とりわけオーストリア側ではEUという別次元のアイデンティティが形成されつつある、とのことであった。

以上いずれの報告も、セミナーでの議論の様子がよくわかるように手際よくまとめられており、私のようなセミナー未参加者にとっても意義のある例会となった。ただ、欲を言えば、グローバル化の認識の異同について説明する際に、両国における世論調査の結果などのデータも示してもらいたかった(例会当日も指摘があったが、日本においても、海外企業との競争を強いられている金融業や製造業など、業種によっては、グローバル化の「脅威」を日々実感している人々もいるはずである)。また、先方の専攻と関心(比較政治論)にもよるのかもしれないが、国民国家・多国籍企業・福祉国家・EUといった、大文字の「政治」や「経済」に関する話題、いわば大文字の Globalization をめぐる議論が多く、私たちの身近な経験や日常生活レベルに即した議論、いわば小文字の globalization に関する議論が少ないような印象を受けた(竹前氏の報告はこの次元に焦点を当てていたようだが)。天下国家レベルの、大文字の Globalization と、私たちの身近な経験としての、小文字の globalization の両者を、有機的にリンクさせていく構想力が求められているように感じた。そうした構想力があってこそ、今回は話題に上らなかった、環境や医療、災害復興などの分野において、グローバルかつ日常的な「草の根」レベルで活動をひろげている各種NPO・NGOの意義が理解できるのではないだろうか。

ただ、そうした展開まで求めるのは、例会当日の限られた時間と枠組み(あと1時間は欲しかった!)の中では無理な注文というものである。こうした方向での展開については、セミナー前後の交流(こちらは、決して大文字の、儀礼的・形式的なものではなく、コンパや都内見物なども交えたカジュアルで密度の濃いものだったそうである)の成果もふまえて、今回のセミナー参加者の方々の個別の研究実践のなかで、追い追いつめられていくものであると期待している(研究活動委員:大谷崇)。

4. 2003 年度の研究助成について

2003 年度の研究助成については、再募集を行ったものの、昨年度に引き続き申請はありませんでした。

5. 「研究助成取り扱い要領」の一部改正について

2003 年 6 月 7 日および同年 7 月 5 日の理事会において、「研究助成取り扱い要領」に関し以下の改定案が提出され、慎重な審議の結果、以下の内容が承認されました。(下線は改定箇所を示す)

【現行】

1. 本研究助成の趣旨
- 2) 助成対象者は本学会会員に限る。
- 3) なお助成の直前の年度まで継続して 3 年以上の会員歴があることを条件とする。

1. 本研究助成の趣旨
- 2) 助成対象者は本学会会員に限る。
- 3) なお助成の直前の年度まで継続して2年以上の会員歴があることを条件とする。

* 本改正は2004年度の申請から適用する。

6. 事務局幹事交代について

2003年7月5日に開催された理事会および総会において、榎本 環氏に替わって下記の会員が新事務局幹事に就任することが承認されました。

小村由香（おむら ゆか：早稲田大学大学院文学研究科社会学専攻 博士課程在籍）

これにともない、事務局のメールアドレスが「hanna1106@asagi.waseda.jp」へと変更になりましたのでご注意ください。

7. 入退会者のお知らせ

理事会において以下7名の入会が承認されました。（以下、敬称略）

2003年6月7日理事会

小村由香（早稲田大学大学院文学研究科） 飯田 卓（早稲田大学大学院文学研究科）
伊野大道（早稲田大学大学院教育学研究科） 袈岩 晶（早稲田大学教育学部非常勤講師）
七邊信重（早稲田大学大学院文学研究科）

2003年7月5日理事会

大貫恵佳 氏（早稲田大学大学院文学研究科） 山田真茂留 氏（早稲田大学文学部）

以下の会員から退会届が提出され、理事会において報告・承認されました。

2003年7月5日理事会

森 元孝 氏（早稲田大学文学部）

以下の会員（2名）がご逝去されました。

小川 忍 2003年2月28日ご逝去 加藤貞夫（加藤税務会計事務所） 2002年12月24日ご逝去

8. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方、および過年度分の未納がある方宛てに、振り込み用紙（お名前と該当の未納

年度を印字しております)を同封いたします。早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020（郵便振替）

加入者名：早稲田社会学会

（年会費：一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円）

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。

会費を3年分以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます（次の3つの権利が失われます。学会大会で報告すること『社会学年誌』へ投稿すること『社会学年誌』の配布を受けること）のでご注意ください。

2000年12月16日の理事会決議にもとづき、事務局では「未納会費の一部が納入された場合には、1997年度以降の最も古い年度の未納分から優先的に充当」する処理をとっております。したがって、本年4月以降にお振り込みいただいた会費が、本年度（2002年度）分ではなく、過年度の未納分として充当されている場合もあります。ご了承ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局（hanna1106@asagi.waseda.jp）までご連絡ください。

以上